

新型コロナ流行後、パリの絵が変わった。

なぜ、生きているのかと 考えてみるのが 今かもしれない

辻 仁成 著
2020年8月26日発売

株式会社あさ出版（代表取締役：佐藤和夫、所在地：東京都豊島区）は、辻 仁成 著『なぜ、生きているのかと考えるのが今かもしれない』を2020年8月26日（水）に刊行いたします。

辻 仁成 氏が描くパンデミックの時代を生き抜く「人間の心構え」

フランス在住の作家・辻仁成氏が、新型コロナの感染拡大とともに変化するパリの日常生活の様子をしたためたWebサイトマガジン「Design Stories」を修正、加筆し書籍化しました。

16歳の息子とともにパリで制限下を生き抜くことになった——。それまであった日常がいきなりストップし変わってしまったなか、絶望から希望を取り戻す方法、親子で力を合わせてこの状況を乗り越えようと頑張った毎日、精神の葛藤などが、日々の写真とともに描かれています。

新型コロナ第二波も懸念され、希望が見えない時代、手に取って下さった方々が大事な日常を放棄しないように寄り添う1冊となっています。

書籍名：なぜ、生きているのかと考えるのが今かもしれない

刊行日：2020年8月26日（水） 価格：1,300円（税別）

著者名：辻 仁成 ページ数：288ページ

ISBN:978-4-86667-224-3

【目次】

- 第1章 新型コロナがやって来た
- 第2章 未曾有の危機へ立ち向かう
- 第3章 体も心も疲れ果てた時だからこそ
- 第4章 世界が落ち着きを取り戻すまでに
ぼくたちが出来ること
- 第5章 アフターコロナの世界で

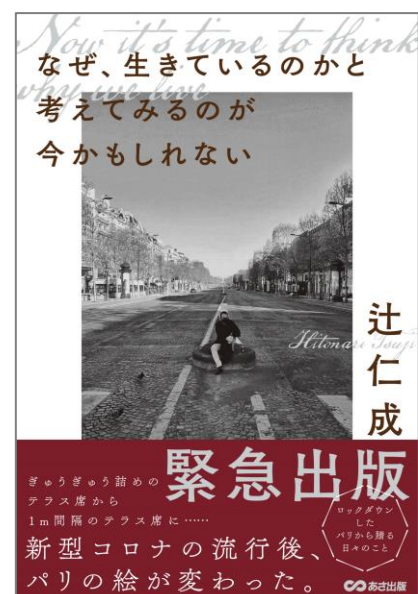
【著者プロフィール】 辻 仁成（つじ・ひとなり）



1989年「ピアニシモ」で第13回すばる文学賞を受賞。以後、作家・ミュージシャン・映画監督・演出家と文学以外の分野でも幅広く活動している。

1997年「海峡の光」で第116回芥川賞、1999年『白仏』の仏語翻訳版「Le Bouddha blanc」でフランスの代表的な文学賞「フェミナ賞・外国小説賞」を日本人として初めて唯一受賞。著作はフランス、ドイツ、スペイン、イタリア、韓国、中国をはじめ各国で翻訳されている。『冷静と情熱のあいだ Blu』『サヨナライツカ』『人生の十か条』など著書多数。パリ在住。

Webサイトマガジン「Design Stories」主宰 <https://www.designstoriesinc.com>



ぼくは2020年の3月17日から5月11日までの約2ヶ月間、パリでロックダウンを経験した。ぼくの人生の中でもはじめての経験だったし、世界を引率するリーダーたちも、医師も、科学者も、軍人も、誰一人それまでロックダウンを経験した者はいなかった。ぼくも、まさか、こんなことを生きている間に経験するなど、想像したことさえなかった。

(あとがきより)



ぼくは車の走っていない大通りの真ん中に仁王立ちし、まばゆい春の太陽を見上げながら、そっと息子の未来を案じた。このウイルスは人と人を引き裂くのが目的なのだ。それでも、ぼくは方法や形態が変わろうと、変わらぬ人間らしさで、みんなと繋がりたい。(第3章 P144より)



ギャルソンはマスクを義務付けられているし、客も席を立つ時、たとえばトイレに行く場合などはマスクをしないとならない、らしい。いやいや、不思議な世界になったものだ。パリの絵が変わる。(第5章 P237より)



初夏の風が吹き、眩しい太陽に目を細め、人々は喜んでいる。観光客のいない、パリ市民だけのパリがそこに広がっていた。いったい何がかつてと異なり、何がこれまでと一緒なのだろう。少しずつ、徐々に分かってくることに違いない。

とりあえずぼくは第二波を警戒し、太陽に感謝しつつも、浮かれないよう気持ちを引き締めておくことにした。(第4章 P232より)



クリストフに肩を抱きしめられて、店の中へ入り、常連たちの真ん中でビールを飲んだ。とっても美味しいビールだった。クリストフがいて、オーナーのジャン・フランソワがいて、給仕のステファニーがいて、名前は知らないけれど、この辺の常連たちがいて、そこにぼくの場所もあって。そうだ、その時、ぼくは幸せだった。幸福とはこういうものだ、とぼくは思った。(第5章 P285より)

書籍に関するお問い合わせ先

古垣（フルガキ）TEL：03-3983-3225 090-4424-6911 furugaki@asa21.com
株式会社あさ出版 東京都豊島区南池袋2-9-9 第一池袋ホワイトビル6階